

AIDS UPDATE

No.53 2005.4.1

広島大学病院

エイズ医療対策室

内線5581（輸血部長室）

Internet: www.aids-chushi.or.jp

『初めてでもできる HIV検査の勧め方 告知の仕方』 ガイドブック

■ 平成16年度厚労省科学研究費補助金エイズ対策研究事業において、ガイドブック『初めてでもできる HIV検査の勧め方告知の仕方』を作成しました。

■ 中国四国地方のHIV感染者/AIDS患者数は、東京や大阪などの大都市圏に比較すると目立ちませんが、確実な増加曲線を描いています。最近では、AIDS発症で受診してからHIV感染が判明したり、患者自らが原因不明の症状にHIV抗体検査を申し出たりといった報告がたびたび聞かれています。患者様の健康を守り、感染の広がりを防ぐためにも、医療従事者がいち早くHIV感染症を疑い、早期に検査を勧める必要があります。

■ 本冊子は、経験の少ない医療者が、HIV抗体検査を勧める際や、また告知の際に感じるであろう不安を取り除き、スムーズに対応できることを目的としたわかりやすいガイドブックです。ぜひ一度ご覧になり、マニュアルとして、あるいは研修のテキストとしてご活用下さい。

■ また、昨年度作成の冊子『HIV検査について—HIV感染のリスクを伝えて検査を勧める医療者のためのガイドブック』でも、抗体検査について詳細が説明されています。冊子をご希望の方は、対策室までご連絡ください。

■ なお、両冊子とも中四国エイズセンターのHPでご覧になることができます。ダウンロードしてご利用下さい。

【 <http://www.aids-chushi.or.jp/c4/menu.htm> 】

パンフレット 『日常診療において HIV抗体検査が必要な時』

■ 同じく平成16年度エイズ対策研究事業で作成されたパンフレットです。国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センターのACCケア支援室の制作です。

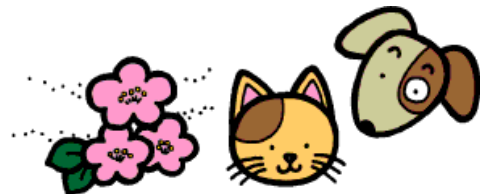
■ 「HIV抗体検査を勧めるべき症例」として、3事例を紹介しています。既往症や経過などから、どこで検査を勧めるべきだったのか、HIV感染症の可能性を考えるきっかけなどポイントを絞って説明しており、こちらも医療者へのガイドブックとしてご活用頂けると思います。

〈シリーズ〉 ナース河部のざっくばらん(No.9) ～ACC看護実務担当者会議報告～

皆様こんにちは。寒さもやわらぎ、少しずつ春の訪れを感じる季節となりました。

今回は先日開催されたACC/ブロック拠点病院看護実務担当者会議に出席して感じたことなどについて書きたいと思います。この会議は1997年から年に3回開催されています。うち一回は看護管理者(看護部長)と共に出席し、各ブロック間の情報交換、討議を行います。今回の会議では、各ブロックの現状報告の他に、来年度の研究などの活動報告、また症例検討会が行われました。

各ブロックの現状報告では、どの地区も新規患者数が右肩上がりに増えていることが共通でした。



特に増加が目立つのが、東京・大阪・名古屋の三大都市でした。当院においても、今までは年に2~3名の新規患者数でしたが、昨年は18人とかなりの増加になっています。

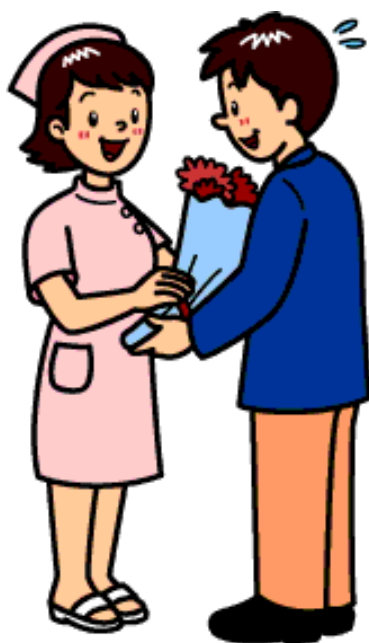
また、特徴として新規患者で薬剤耐性遺伝子をもつ患者の増加が目立ってきています。これは抗HIV薬を内服している患者からの感染の可能性を示しています。食べること、寝ることなどと同じ人間の基本的欲求である性（セックス）を介して侵入してくるウイルスに対する予防がきちんととられていないことが原因のひとつだと思います。

耐性の怖さは、自分が未治療で抗HIV薬を始めていないにも関わらず、薬の効きが劣るウイルスが体に入っていることになり、その人の治療選択域を狭めてしまうことです。現在認可されている抗HIV薬は約20種類ありますが、交差耐性を考えれば、治療薬の選択は3回くらいまでが限度と言われています。自分も相手も大事にできる視点を持つことが重要であり、それを支えていくのも看護の役割だと感じています。

症例検討では、各ブロックの実務担当者が一例ずつ症例を出し、実際の関わりを出しながら皆で討

議していくという、初めての試みでした。私も患者さんの同意を得て症例提示しましたが、普段の看護だけでは見えないものを冷静に見ることができたように思いました。実際、時系列で患者さんの状況を書き、そこでの患者さんの発言や、思いなど書き出していくと、距離をおいて考えることができたように思います。とても貴重な体験でした。

参加者の看護師の多くから「普段一人で接していると、これでいいのかと不安になることも多かった。皆に聞いてもらって安心できた。」「いろんなケースを疑似体験でき、勉強になった。」といった意見が出されました。皆抱えている問題が大きく、支援者側にもかなりの心理的負担が多いこともわかりました。ケア提供者への支援不足もあるのかなと感じました。支援者のケアを充実させていくことが、いい方向での患者さんへのケアにつながるのではないかと感じた症例検討でした。私自身、院内では一人でHIV担当看護師として働いているのでこういう同じ立場で働いている方々との討議は大変ためになり、元気をもらいました。当院で開催予定の研修会に是非使いたいと思います。【KAWABE】



<ご意見募集>

「AIDS UPDATE」は今後も不定期に発行します。ご意見やご希望がありましたら輸血部(5581)までお寄せ下さい。

[TAKATA, OE]

nobotaka@hiroshima-u.ac.jp